



廊下を歩いていると、学級文庫の棚の辺りで子どもが話しかけてきました。

「私は今、1000 ページ読んだから、あともう少し。」

「去年は〇ページ読んで、目標達成したよ。」

子どもたちは1学期の読書達成を目指して、毎日少しずつ読み進めています。そんな姿に励ましの気持ちを込めて、今日は、本にまつわる話です。

ページの向こう側にある「出会い」

24日の全校朝会では、「強さとは」「かしこさとは」という問いを子どもたちに投げかけました。

「筋肉もりもりが強い」「勉強ができる子がかしい」。そんな声が挙がる中、一編の詩を紹介しました。

「わからない」

お父さんは
お母さんに怒鳴りました
こんなことわからんのか

お母さんは兄さんを叱りました
どうしてわからないの

お兄さんは妹につっかかりました
お前はバカだな

妹は犬の頭をなでて
よしよしといいました

犬の名はジョンといいます

（杉山平一『希望』（編集工房ノア、2011年）より）

朝会では、詩を読んだ後に「強さって何だろう。かしこさって何だろう。」と問いかけて終わりました。

すると昼頃、2人の3年生の男の子が職員室に私を訪ねてきました。

朝の問いの答えを伝えに来たようです。

子「ぼくはね。やっぱり強いっていうのは、力が強いってことじゃないと思うんだ。」

私「そう。じゃあ、あの詩の中で一番強いのは誰？」

子「妹だよ。」

私「一番小さいのに？」

子「筋肉とかじゃなくて、心が強い。『強い』っていうのは、心の強さなんだよ。」

一番小さくて物事も知らないはずの妹が、負の連鎖をそっと止める。そこには、誰かを傷つけずに受け止める「心の強さ」がありました。子どもたちが自分の言葉で語ってくれたことが、とても印象に残りました。

小学校では、5月から、ブログでも紹介したポッケの皆さんが、ボランティアで読み聞かせをしてくださっています。

声が物語に命を吹き込み、あたたかさや悲しさが子どもたちの心に届きます。文字に血が通うように感じられる—それが読み聞かせの魅力です。

作家・朝井まかてさんは、昔の家庭で語り継がれた「噺」について、次のように書いています。

“親や祖父母は夜、膝に抱えた子どもにそんな噺を語り聞かせて寝かしつける。

知恵者に育てと、笑い話に話して。でなければ痛い目に遭うぞと。あるいは、胸の躍る冒険譚によって、勇気の何たるかを教える。人の心の狡さや恐ろしさを注意深く伝えながら、励ますのだ。生まれたこの世を生きて生きて、行き尽くせと。”

（朝井まかて『雲上運下』（徳間文庫、2021）より）

詩にも民話にも物語にも、日常では出会えない出会いがあります。会ったことのない「妹」をすごいと思う子がいるように、本は子どもたちに新しい価値観や生き方を教えてくれます。

本との出会いが、子どもたちの心を豊かに育ててくれることを願っています。